

少子高齢化社会の突入とともに、過疎を通り越した限界集落が顕在化している。その「最先端」に位置しているのが離島地域である。若年層がいなくなり、高齢化が進み、人がいなくなるようなイメージの中、次につながる新たな動きがみられる島々を取り上げたのが本書である。ここに取り上げられた七つの島々には「逆風」「負の風」に負けない「あたらしい風」が吹いている。編者を中心とする日本地理学会離島研究グループ7人の地理学者により、ツーリズム、異業種への取り組み、人口増加という三つのあたらしい風に注目している。

本書は、上記研究グループの長年にわたる活動の成果の一つである。同グループ主催で開かれた2007年10月の日本地理学会シンポジウムの成果を一般向けに改めたものとなっている。

本書の構成ならびに各章の著者は次のとおりである。

- I. インバウンド観光に揺れる「国境の島」— 対馬（長崎県）— 助重雄久
- II. キリシタン・ツーリズムが展開する島々— 五島列島（長崎県）— 松井圭介
- III. グリーン・ツーリズムの導入を模索する島— 粟島（新潟県）— 山田浩久
- IV. ブルー・ツーリズムの定着を図る島々— 岐島・青島（長崎県）— 中村周作
- V. エコツーリズムの展開と住民評価— 西表島（沖縄県）— 宮内久光
- VI. エミュー牧場を経営する漁業の島— 蓋井島（山口県）— 平岡昭利
- VII. I ターン者が急増する南国の島— 石垣島（沖縄県）— 石川雄一

I～Vがツーリズムについて、VIが異業種へのチャレンジ、VIIが人口増加という構成になっている。7章のうち5章がツーリズムに割かれており、離島におけるツーリズム（観光）の重要性が見受けられる。以下、Iから順を追って内容を見ることとする。

離島に吹く一つ目の風であるツーリズムについて、編者は「従来、余り注目されることの少なかった離島の自然や歴史、文化、生活などを逆手にとって、それをむしろ都市生活にない島の魅力であるとして、観光客を呼び込もうとする試みの風」（1頁）として捉えている。

まず、はじめに取り上げられた対馬のような「国境の島」には、日本の本土から時間と交通費をかけなければ行けない場所である。このため、本土の旅行者をターゲットとすると、同様の時間と費用がかかる海外との競争にさらされることになる。そこで、「近隣諸国」をターゲットにすることで「距離的にも時間的にも身近であるうえに、国内旅行よりも安い交通費でいける場所として認識」（2頁）され、他にはない特徴となる。この逆転の発想が重要である。経済発展を遂げる近隣諸国からの観光客受入は、島の産業が衰退する中で経済効果として見逃せないものとなっている。しかし、近いとはいえやはり外国である。そこには社会的習慣の違いからくるコンフリクトが発生し、それは「インバウンド観光を促進しようとするすべての観光地が直面する問題」（20頁）である。そうした障害を乗り越えるため、著者は慣習・文化の理解の必要性を訴えている。また、観光ルートとそうでない地域との受け入れムードの「温度差」も気になる点である。

五島列島では、キリシタン弾圧の歴史的背景を含んだ文化と、その具現化された教会堂を、島民が再認識し「オンリーワンの資源」（26頁）として観光のために役立てようとしている。そこには、巡礼目的やヒーリング（癒し）を求める観光、教会などの建造物への魅力を求める人々が数多く訪れるようになった。教会群をテーマとする世界遺産登録を目指した観光振興の中で、著者は「教会群を観光資源化しようとする動きが強くなれば、教会本来の意味である祈りの場としての宗教空間、そして人々の暮らしが変容する危険性をはらんでいることは否めない」（39～40頁）と危惧を抱いている。その一方、世界遺産登録の夢は島民に「誇りと愛着をさらに喚起する力を与え」（40頁）るものとしている。信徒の言葉を借りて、認められることの喜びから来る、島民のアイデンティティの確認・強化を示している。

粟島では、島の生活や食文化を資源としたグ

リーン・ツーリズムに取り組もうとしている。これまでは村が中心となって歌碑の設置やキャンプ場の整備、温泉開発などハード面の整備をおこなう一方、貸自転車の運営や名物料理の「わっぱ煮」のマスコミ対応、「Walking Map」の作成など、ソフト面でも取り組みをおこなってきた。このような素地のある粟島で、新潟県が主導して、グリーンツーリズムを進めている。その目的は、既存の観光政策をパッケージ化し、島の経済振興を図ろうとするものである。しかし、著者はそこに「違和感」(51頁)と懸念を示している。違和感とは、グリーン・ツーリズムが商業的な価値観とは違う観光の姿として提唱されてきたにもかかわらず、粟島では経済振興策として位置づけられている点である。また、著者の懸念とは「島の生活に即した家族経営によって形成されてきた個性を新しい観光政策によって画一化」(55頁)してしまうのではないかという点である。地域よりも観光客が優先されるような観光開発は、「真の意味での地域振興に結びつかない」(54頁)ばかりか、本来持っている地域の良さを失わせてしまう。筆者の言うように、粟島と島民のための観光開発でなければならない。「誰のための観光開発か」という視点は、今後そうした開発を進めていく上で忘れてはならないことである。

杵岐島・青島は、島の基幹産業である漁業を活用したブルー・ツーリズムの取り組み事例として取り上げられている。杵岐島では漁協の観光部が運営主体となり主に修学旅行生の受入で成果を上げている。青島ではNPO法人が主体となり、修学旅行生や一般観光客を受入れるほか、地元での観光客受入を担うインストラクター育成を制度化している。

杵岐島では、今後の課題として、通過型から宿泊型観光への転換と体験メニューの拡充、地元住民のさらなる理解・協力が必要としている。一方、青島では、地元住民にブルー・ツーリズムが浸透しており、副業の域を出ないものの経済効果にもあらわれている。さらに、修学旅行生など子どもたちとの交流が、高齢化した地域にもたらす効果が大きいことがわかった。

ブルー・ツーリズムも普及期間から質的向上を図る時期にきており、著者の言う「下からの活動推進」(評者注：地元住民が活動運営に積極的にか

かわっていくこと)が発生しない限り、上からのかけ声(評者注：行政や漁協などによる全面的な企画立案・運営)だけに終始していれば、やがてブルー・ツーリズムの活動事態が淘汰、消滅してしまう危険性もある」(58頁)との指摘は、地域活性化をおこなう上で非常に有益なものといえる。

島の自然的資源に注目したエコツーリズムの先進地が西表島である。1970年代にはエコツーリズム的な考え方が取り入れられていた。エコツーリズム協会を中心に、観光事業者でも環境保全のための自主規制に取り組むなど、環境への意識が高い。しかし、住民の評価からは、エコツーリズムの取り組みと住民意識との乖離がみられた。とくに、住民の属性(出身地、観光収入の有無、年齢など)により大きく評価が分かれていた。主体的に島の住民がかかわっていればこのような結果にはならないはずであり、そうではなかったという意識が表に出た結果だといえる。また、「県外出身の観光事業者たちの中には、エコツーリズムという言葉に極度に嫌う人たちがいる」(85頁)ことに注目したい。こうした事業者が本来のエコツーリズム理念を実践しているはずなのに、「エコ」という言葉を避けている。ツアー内容についてエコか否かの批判が出やすいことをその要因としている。このため「エコアレルギーを起こし、エコツーリズムの理念に賛同しても、それとは距離を置く人が出てくる」(同)のである。ここに「環境(エコ)」を売りにしたツーリズムと環境保全との両立の難しさがあるといえる。筆者は今後西表島の環境を保っていくために、観光客の総量規制、ゾーンニング、法定外目的税の導入を視野に入れ、地元関係者のみならず大手旅行代理店を含めて方策を検討する必要があるとしている。

次に二つ目の風である「離島の従来の就業とは、まったく違う異業種へのチャレンジの風」(2頁)の例としては、蓋井島を取り上げている。この島では島民自らが、何とかして活気を取り戻そうと、これまでの産業とはまったく異なる「エミュー」の飼育に取り組んだ。その背景には、生き残っていくための「常にチャレンジとチェンジが必要」(91頁)とされる島の伝統が存在した。蓋井島の場合、大正初期の牛の放牧にはじまり、椿油採取のためのツバキ栽培、戦後のミカン栽培

等常に新しいものにチャレンジしてきた。そうした流れの中で、オーストラリア原産のエミューという大型鳥類に出会い、住民の新たな挑戦がはじまった。そして、飼育とともにエミューから捕れるエミューオイルの生産を開始する。エミューオイルには脂肪酸が多く含まれ、浸透性が高いのでスキンケアオイルとしても注目されている。採れたオイルは島内の売店の他、インターネットでの販売をおこなっている。価格を低く抑えたため、副業的経営であるが、エミューの飼育、オイルの採取は軌道に乗った。

2002年に8羽でエミュー飼育をはじめたのが、100羽を超えるまでに拡大した。筆者は「チャレンジしながら副業的にやってきた仕事が、一つの産業基盤を形成した」(97頁)として、たまごの販売の他、蓋井島独自の存在であるエミューそのものの観光資源としての性格に期待を持っている。「他地域にはほとんどない「エミューという独特の商品」を活かせる道が、この小さな蓋井島にはある」(同)とオンリーワンのものを見つけ出し、産業化に至った好事例を締めくくっている。

最後となる三つ目の風「多くの離島が人口減少や高齢化に悩むなか、人口増加の風が吹く島」(2頁)として、石垣島が登場する。石垣島の人口は、Iターン者を要因とした高い転入率に支えられ増加している。Iターン者の形態は様々である。実験的にウィークリーマンションに住みながら定住を始める者や若気の至りで来てしまった者、定住者であるが都会の生活を持ち込もうとする者、逆にムラの暮らしに馴染もうとする者等多様である。また、暮らしぶりも同様に多様であり、農業経営を志していたり、現地の観光及び関連産業で生計を立てたり、趣味を活用したサービス業に従事したりしている。

筆者はそのようなIターン者が多く居住する石垣島北岸の2集落を事例に、Iターン者の前職や前住地、移住理由などを明らかにした。移住要因

として、移住者の側には「プッシュ（押し出される要因）とプル（引き寄せられる要因）」(109頁)がある。その一方、集落側の移住を容易にした要因としては、対象集落が戦後の開拓集落のため、開拓二世が流出することで一世のみの高齢化世帯が増加、あわせて空き家の出現といった状況下にある。さらに開拓集落のため伝統のしがらみが少ないことが、Iターン者の受入を容易にしている要因である。

Iターン者と島民とのトラブルがある島もある中、筆者はIターン者を「地域社会を再生する力」(110頁)として捉えることの重要性を説いている。そのためには、Iターン者に対し島の伝統や慣習を押しつけるのではなく、島とIターン者、両者の持つ「文化や生活様式を融合させた新たな地域社会形成に取り組む必要」(111頁)があるとし、「人口減少に悩む同じような離島においても変化を拒むのではなく、新米者がもたらす新しい風を受け入れる必要があるのでは」(同)としている。

以上、離島に吹くあたらしい風を七つの事例から概観した。各事例は、離島という諸条件の厳しい場所において取り組まれているものであり、離島のみならず、高齢化・過疎化に悩む地域において十分応用のできる内容となっている。異文化の相互理解、島民の抱く誇りと愛着の大切さ、島固有の魅力とは何か、ボトムアップの重要性、新たなものへのチャレンジ、そしてIターン者の受け入れと理解の必要性など、離島振興のみならず地域振興を進める上でカギとなる内容が含まれている。

基幹産業の不振、公共事業の削減、少子高齢化、人口減少など負の風が吹き荒れている。しかし、新たな発想とともにあたらしい風を受け入れる度量があれば、一つの突破口が見えてくる。そのようなことを訴えかけている本となっている。

(高木 亨)